

CAPNA

キャプナニュースレター69号

名古屋市名東区で昨年11月、中学2年の男子生徒が母親の交際相手に暴行されて死亡した事件は、大きな衝撃を呼びました。

総務省は1月20日、保育所や小中学校で虐待を疑いながら児童相談所などに通告しなかったり、通告まで時間がかかりすぎる例がみられるとして、厚生労働省と文部科学省に改善を勧告しました。

「疑わしきは通告を」は、CAPNAが1995年に結成された当初から訴えてきたことですが、教育現場になかなか浸透せず、多くの悲劇が繰り返されてきました。

今回の勧告の意味を、関係者はきちんと受け止めてほしいものです。

Vol.

69

予期しない妊娠！小さな命どう支える

電話相談員必須研修から

CAPNA 電話相談員継続のための必須研修が、1月14・15日の二日間にわたって名古屋市中区金山の同市都市センターで開かれました。

CAPNA ホットラインは1995年の活動開始以来、虐待防止のために大きな貢献を果たしてきました。いまでは虐待に対応する制度も強化され、行政の取り組みも大きく変化して、虐待防止の認識が深まることで救われる親と子どもは確実に増えました。しかしその傍らにはそれでも減らない虐待という別の問題が残されています。

民間団体として虐待防止のために活動するCAPNAに、今できることは何か？今年度の必須研修はそんな思いをこめて準備されたものでした。

講師として刈谷児童相談所の所長を務められ、現在はCAPNA理事でもある萬屋さんと、萬屋さんの先輩で里親委託・養子縁組に心血をそそぐ矢満田さんを迎えて、予期しない妊娠によって生まれてくる命のリレーについて学び、わたしたちにできることを考える研修となりました。

事情があって生みの親では育てることができなかった小さな命の火が、養子縁組や里親に委託されて成長していく姿をスライドやDVDで見て、そこにある親子の幸せな笑顔に、この命が守られることが無かったならと思うと胸が痛みました。

子育ては社会的役割に変わりつつある今の時代に、CAPNAの役割も変えることを求められていると感じたスタッフは多かったのではないのでしょうか。新たな一歩となる必須研修となりました。

ご寄付 皆様からご寄付をいただきました。心より御礼申し上げます。

【個人】 (2011.10.1～2011.12.31分、順不同・敬称略)

萬屋育子、競朗子、加藤順子、植田有里子、篠原祐三、今西洋子、木村剛、矢満田篤二、江口このみ、早川真理、内山品幸、木村たき子、前島美津枝、塚崎真澄、茶谷裕子、柴田美智子、西田功一

他匿名希望6名

【団体】

ジェイアール東海物流労働組合、在日米国商工会議所中部支所、みつばの会

CAPNA ニュースレター 69号

2012年1月15日発行

発行 認定NPO法人 CAPNA

事務局 〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-4-404 TEL.052-232-2880 FAX.052-232-2882

印刷 社会福祉法人名古屋ライトハウス光和寮



揺さぶられ症候群の怖さを知って！

予防プログラム普及事業スタート

CAPNAは昨年9月から、「乳幼児揺さぶられ症候群(Shaken Baby Syndrome = 以下 SBS)」の予防プログラムの普及事業を始めました。研修を受けた電話相談員などのスタッフが、各地で保健師、助産師、行政職員、子育て支援者らに、SBSの怖さと啓発の大切さを伝えています。



子育て広場でSBSの啓発するスタッフ = 刈谷市で

SBSは、乳幼児が暴力的に揺さぶられることによって引き起こされる身体的虐待の一種です。

赤ちゃんに「高い高い」をして揺らすような通常のあやし方で発症することはありません。おんぶしたままジョギングするといった行為や、ベッドから落ちる事故でも起こりません。

明らかに危険だと思えるような激しい揺さぶりによって、乳幼児の脳が何度も頭蓋骨に打ち付けられて起こる頭部損傷がSBSです。

診断基準としては「頭蓋内出血・びまん性脳浮腫・網膜出血」の三つの特徴があるとされています。

頭蓋内出血とは、硬膜下血腫、クモ膜下出血のこと。びまん性脳浮腫とは、脳が全体的に腫れて、頭蓋骨の内側の圧が高くなっている状態のこと。網膜出血は眼底出血ともいい、外から見ても分からないので、検査が必要です。詳しいリーフレットは、日本小児科学会のホームページからダウンロード

できます。(http://www.jpeds.or.jp/saisin/070815_shaken.pdf)

SBSは、首のすわらない赤ちゃんだけでなく、もっと年長の幼児にも起きることがあります。そして、4人に1人が命を落とし、生き残っても3人に1人は脳などに重い障害を持ち、失明、麻痺、運動障害、認知障害、行動障害などが残るといわれています。

厚生労働省研究班が07年4月～08年3月に行った実態調査では全国の児童相談所211ヶ所(回収率73%)と児童福祉施設511ヶ所(51.7%)が把握したSBSの被害児は疑いを含め118人にのぼり、このうち8人は死亡していたことがわかりました。

外傷がなく、三つの特徴がそろわないケースは「乳幼児突然死症候群」(SIDS)として扱われる可

能性もあり、判明してない被害はかなりの数にのぼるのではないかとみられています。

最近では名古屋市で昨年6月に中区で起こった6ヶ月女児の死亡事件も、肋骨骨折(揺さぶる際に脇を強く握るためにおこる骨折)とびまん性脳浮腫を合併していることから、SBSが極めて疑わしい事例です。

また、2000年12月の日本子どもの虐待防止学会(JaSPCAN)あいち大会直後に、武豊町で3歳の女児がネグレクトによって死亡した事件も、両親のネグレクトのきっかけになった発達遅滞を引き起こしたのがSBSだったとされています。

SBSは、赤ちゃんが泣くことに一瞬自制心を失ったおとなが泣き止ませようと激しく揺さぶることによって引き起こされるもので、殺意があるわけではなく、無知によるものがほとんどで、誰でも加害者になる可能性があります。ゆえに親や養育者に対する予防教育が有効で、SBSは予防可能な虐待とも言えます。欧米では加害者の70%が男性(実父または母親のボーイフレンド)ですが、日本では母親が養育にかかわる度合いが高いため50%が実母となっています。父親の育児参加が推奨されている中、父親への教育も重要になってくると思われます。また、どの程度の揺さぶりが重大な結果を引き起こすのかを不安に思っている親も多く、この予防プログラムの普及はそのような育児不安の解消にも有効です。

CAPNAはアメリカ合衆国のNPO「National Center on Shaken Baby Syndrome」(<http://www.dontshake.org>)に登録。SBSの研究で知られるマーク・ディアス医師、マーチン・ベア博士が開発したプログラムや人形、CD、DVDなどの啓発グッズを輸入して、研修に活用しています。

現在、名古屋市内の11区と県内の3市から研修の依頼があり、スタッフが手分けして出かけています。

研修で使うCDは、赤ちゃんの泣き声を聞いて、支援者や親たちが自分の心理状態を見つめるという啓発グッズです。泣き声は、SBSを引き起こすナンバーワンの引き金です。また、DVDは、新生児の「理由の分からない大泣き」を「Purple Cry」と呼び、それが生後2ヶ月でピークに達して、4、5ヶ月でほぼ収まることなどを解説しています。親の不安を減らし、見通しを持たせることを目的としています。

CAPNAは2006年に、神奈川の認定NPO法人子ども虐待ネグレクトネットワークの山田不二子理事長(医師)を招き、愛知県、名古屋市にてSBSの研修を行いました。名古屋市はその直後にSBSを予防するためのパンフレット、ポスターを作成し、CAPNAが協力している地域子育て支援事業「こんにちは赤ちゃん訪問」でも活用しています。

その取り組みを発展させたのが、今回の事業です。CAPNAスタッフの行う研修で、子育て中の親や養育者に直接予防プログラムを届けることができる支援者が増え、一人でも多くの子どもの命が救われることを願っています。

この事業は、CAPNA創設メンバーの一人で、理事だった故・上野美子さん(2009年逝去、享年64歳)のご遺族からの寄付をもとに、運営しています。